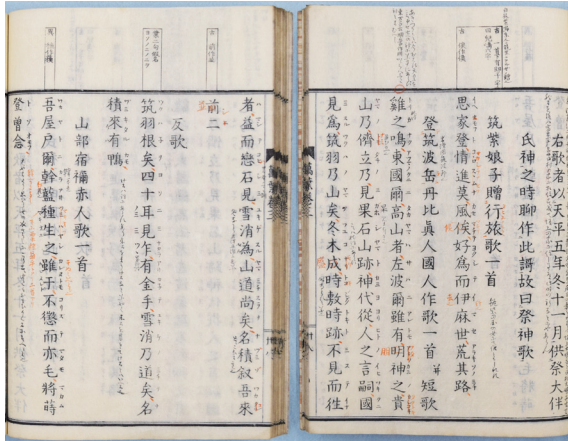
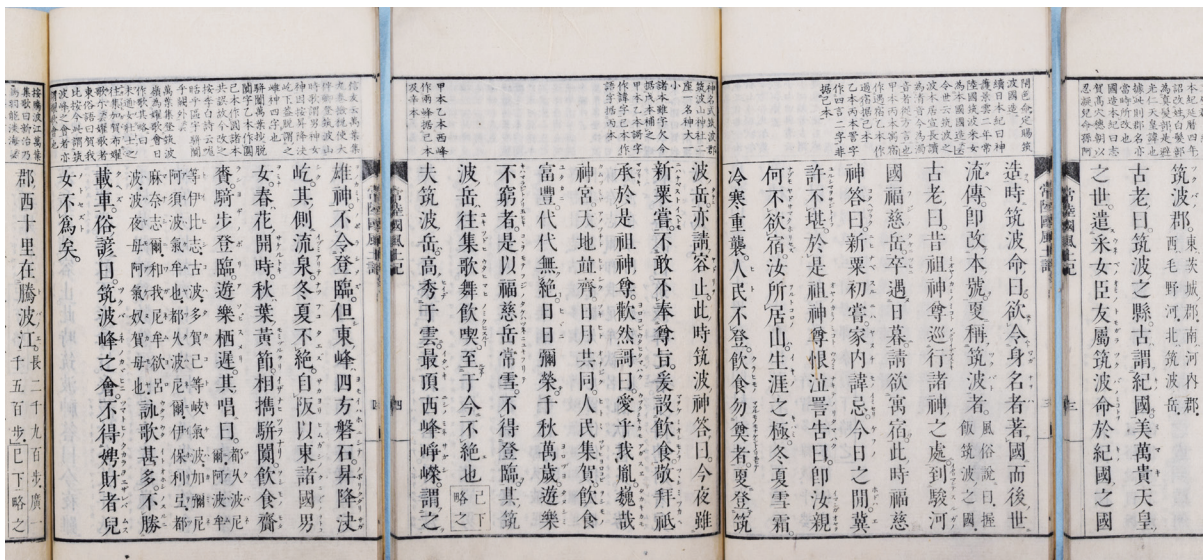


小特集◆名峰・筑波山

八月一日の「山の日」は、平成二八（二〇一六）年から国民の祝日となりました。山は古くから信仰対象とされて崇められる存在であり、また、近世・近代になると、レジャーやスポーツとしての登山の場としても愛好されてきました。本学から仰ぐ名峰・筑波山もそうした山の一つです。本展示では筑波山の歴史・文学・文化を紹介します。



- 1 万葉和歌集（万葉集） 20巻20冊
 まんようわ かしゅう まんようしゅう
 橋本経亮・山田以文校訂 京都：出雲寺文治郎 文化2（1805）年刊
 いずもじぶんじょう
 最古の和歌集である『万葉集』の巻3には、丹比真人国人が「筑波岳」に登った時の歌があり、筑波山を、東国の高山の中で「册神の貴き山」、神代から語り継がれる「国見」の山として讃える。本資料には多数の加筆があるが、朱墨は近世の国学者賀茂真淵らの校異に基づく。（請求記号 ル212-1 / 貴重書）



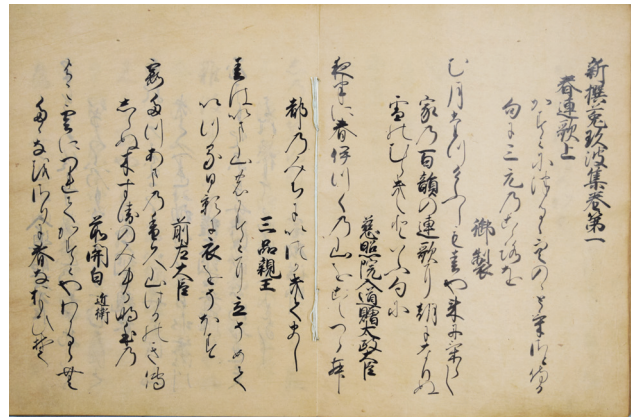
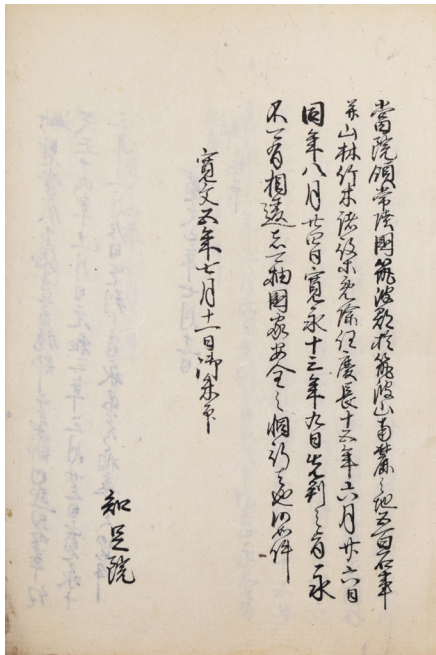
- 2 常陸風土記 1巻1冊 西野宣明校訂 水戸：聴松軒 天保10（1839）年刊
 ひたちふ ど き にしののぶあき ちょうしょうけん
 奈良時代の風土記は5か国分が現存する。その一つである『常陸風土記』は江戸時代後期に水戸藩で版行された。その筑波郡条には、筑波山で男女が春秋に集い飲食する歌垣（姫歌）の光景が描かれている。（請求記号 ネ314-1；213.1-N85）

- 3 後撰和歌集 10巻1冊（存巻11-20）
 こせんわ かしゅう
 【大中臣能宣ほか撰】 江戸時代初期以前写

本資料は村上天皇の命による2番目の勅撰和歌集の代表的な写本で、下巻のみが現存する。寛永14（1637）年の公家烏丸光広による鑑定によれば、本文は二条為定（延文5（1360）年没）筆。巻11に収められる陽成院が筑波山から流れ落ちる男女川を詠む恋の歌は、『百人一首』にも採用されている。

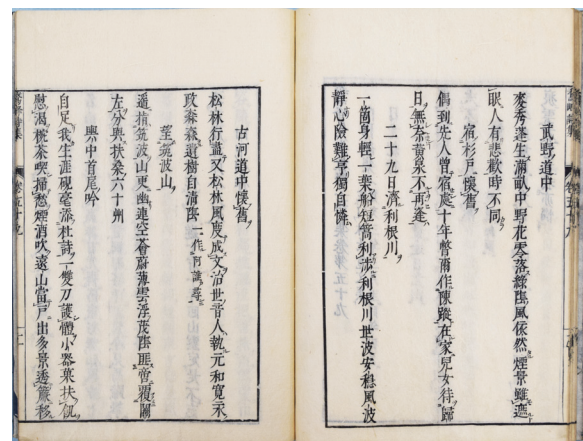
（請求記号 ル210-132 / 貴重書）





- 4 新撰寛玖波集 20巻4冊
一条冬良・飯尾宗祇撰 三条西実隆ほか写 明応8(1499)年写
連歌は、筑波山を詠み込んだ 倭 建 命・御火焼翁の唱和問答歌(『古事記』)を起源とされ、「筑波の道」とも呼ばれる。本資料は戦国大名大内政弘発願による明応4(1495)年成立の准勅撰連歌選集の写本で、巻1-5の1冊は公家三条西実隆の筆による。
〔請求記号 ル 220-34 / 貴重書〕

- 5 朱印録 11巻11冊 江戸時代写
将軍徳川家綱の寛文印知による領知朱印状を集成した『寛文朱印留』の写本。筑波山は神仏習合の霊山で、別当中禅寺知足院は、江戸時代には徳川將軍家の信仰も得た。領知は慶長15(1610)年に寄進された山の南麓500石で、家綱からも寛文5(1665)年付けで安堵された。
〔請求記号 ハ 360-63〕



- 6 鶯峰先生林学士詩集 120巻・目録3巻・附録1巻54冊
林鶯峰著 林鳳岡ほか編 元禄2(1689)年刊
江戸時代前期の朱子学者林鶯峰の漢詩集(遺稿)で、本資料は尾張名古屋藩藩校明倫堂の旧蔵書。寛文3(1663)年に将軍徳川家綱の日光社参に随行した際の漢詩(巻59)には、日光へ向かう古河宿(茨城県古河市)周辺で筑波山を望んで詠んだ詩が含まれる。
〔請求記号 ル 295-13 / 貴重書〕



- 7 寛玖波山名跡誌(筑波山名跡誌) 1巻1冊
上生庵亮盛著・小泉良栄画 安永8(1779)年刊
筑波山は、近世には信仰、ついで観光・レジャーの対象となった。本資料は、その参詣者・登山者を案内するガイドブックとして出版された。古代以来の歌枕、神仏習合期の景観・伝承に詳しい。
〔請求記号 ネ 306-14〕

※ 展示中の本学貴重図書については、『筑波大学和漢貴重図書目録』、および当館特別展図録『日本古代の学問と萬葉集』、『筑波大学開学30周年(創基131年)記念附属図書館貴重図書特別展』、『図書館を飛び出した書物たち』も御参照ください。